

礼拝さいこう

新型コロナウイルスに直面して教会は・・・

教会音楽室長 江原美歌子

いろいろな角度から「礼拝」を学びあい、新たに「礼拝」を発見していく場をと願い、このニュースレターを開始して19回目を数えます。その中で、今ほど、世界の教会が「礼拝」の「再考」に迫られ、「礼拝」の「再興」を願わされている時は無いのではないのでしょうか？ これまであたりまえに続けてきたことが叶わず、先が見えず、答えをすぐに見いだすことができない中を歩んでいます。

多くの課題に翻弄されつつも、できることから始めていこうと、「礼拝さいこう」ニュースレターでは、今年度一年をかけて教会の取り組み（事例紹介）をお分かちしていくことといたしました。事例紹介を通して、この歩みが「独り」ではないことが覚えられ、様々な証しや取り組みから示唆を受けて「礼拝、賛美とは何か」を考える機会となり、そして「カウンターコメント」の応答によって、それぞれの対話がつなぎあわされていくことを願っています。「礼拝をさいこうする」語り合いを通して励ましあいつつ、共に歩んでまいりましょう！

Index

- 1) 「“礼拝の中止”から“それぞれの場所での礼拝”へ」・・・石橋大輔（札幌）
- 2) 「コロナ危機の中の教会の礼拝の取り組みと経験」・・・森 淳一（高崎）
- 3) 「コロナ危機の中で礼拝を続けて」・・・猿渡葉子（篠崎）
- 4) 「共に主を仰ぐ群れをめざして」・・・原田攝生（静岡）
- 5) 「四日市教会の礼拝の取り組み」・・・加藤美代子（四日市）
- 6) 「コロナ危機の中での神戸西教会の礼拝対応」・・・松本理（神戸西）
- 7) 「久留米教会の取り組み」・・・踊真一郎（久留米）
- 8) 「コロナ危機の中で受けた礼拝の恵み」・・・曹 銀珉（長崎）
- 9) 事例紹介に応答して～カウンターコメント・・・濱野道雄（鳥栖）
- 10) 宣研ニュースレター「感染症と宗教改革者たち」を受けて、教会音楽史をあらためて振り返る
- 11) アメリカ・カナダ賛美歌学会大会報告
- 12) コロナ危機にあって 礼拝と賛美歌著作権
- 13) 礼拝と賛美歌著作権Q&A・・・教会音楽室

「“礼拝の中止”から

“それぞれの場所での礼拝”へ」

札幌教会 石橋 大輔

冬の風物詩である雪まつり会場での感染拡大によって、全国でもいち早く新型コロナウイルスが広まった札幌で、「金沢教会は礼拝をお休みにすることにしました」と杉山望副牧師（現金沢キリスト教会牧師）から聞かされたのは2月最終週のことでした。既に3/1（日）に予定していた定期総会の延期と、礼拝以外のプログラムの中止を決め、教会員に知らせる直前だったのですが、市教委からの要請で附属のひかり幼稚園を実質8日まで臨時休園にするという決断をしたこともあり、急遽教会も8日までの礼拝を含めたすべての集会を中止することとしました。「礼拝を中止する」というこれまでは想定しなかった表現を用いたこともあり、教会内外からご批判の声も受けましたが、あの時点で、伝達した情報が曖昧になることを避けるためには、そう表現せざるを得なかっただろうと振り返っています。

ただ、結局その後、6月末までの4か月間「礼拝を中止」しましたが、その間に、わたしたちは決して礼拝自体を中止してなどおらず、むしろ共に集まることのできない中で、顔を合わせられない仲間のことを強く意識しながら礼拝していることを思わせ、途中からは「“集会としての礼拝”はお休みし“それぞれの場所での礼拝”をささげます」と表現を改めました。その“それぞれの場所での礼拝”を整えるために、様々な機器や媒体を駆使して情報共有に努めていく過程は、ただ単に機器や環境の課題をクリアしようとした過程ではなく、「誰と、どこで、どのようにして、共に礼拝するのか」ということを皆で必死に思考して

いった過程だったと感じさせられたからです。

7月からは“集会としての礼拝”を再開しましたが、“それぞれの場所での礼拝”もなお継続しています。会堂に集まっている人たちだけでささげられるわけではなく、集まっている人たちだけが恵みを受けるわけでもなく、集まっている人たちだけの祝福を祈るわけでもない礼拝が意識されています。

そのような中、7/9（日）の夕方には、近所の小学校でコロナウイルスに感染した児童が出たとの連絡が入り、その児童の学年は2週間の学年閉鎖、牧師も“濃厚接触者の家族”とされました。それを受け、教会は再度、学年閉鎖期間に合わせて、23日までの礼拝を含めたすべての集会の中止を決めました。地域では身近に感染者が出たという不安から、感染者特定の動きや小学校への誹謗中傷の動きが始まっていました。教会がそのような“負の連鎖”に加わらないことを確認し、更に地域での感染拡大を防止するために自分たちの集会を中止することを決断しました。コロナ危機を過す中で、教会が様々なプロジェクトに取り組みながら与えられていった“地域と生きる教会”という方向性が、しっかりと表された決断だったと感じています。

「コロナ危機の中での教会の礼拝の取り組みと経験」

高崎教会 森 淳一

高崎教会は、国の「緊急事態宣言」が全国に拡大された4月中旬に臨時役員会を開催し、主日礼拝をはじめとする教会に集っての集会を休止するか否かを協議しました。役員会では礼拝休止に慎重な意見が出される一方で、教会員の中に健康に不安（基礎疾患）があるメンバーがいること、また感染拡大防止という観点からも人が集う教会は地域社会に対して一定の責任があることなどの理由により、主日礼拝をはじめとする集会を5月末まで休止としました（6月再開）。休止の期間、特に主日礼拝は各家庭での礼拝をお願いし、そのサポートとして教会ホームページ上に宣教原稿を掲載しました。ネット環境にない教会員に対しては、牧師から宣教原稿を郵送することで対応しました。

教会役員会の礼拝休止の判断に対しては、概ね理解を得られたものと感じています。再開後、休止中に感じたことを教会員同士分かち合う中で、休止が長期化（7主日）するにつれ、多くの教会員が共に在って礼拝をささげること自体が大きな恵みであると感じたと分かりました。しかし一方で、これまであまり教会に来ることがなかった家族と共に礼拝する機会が得られたとか、心の病のため長期間礼拝を休んでいる教会員が、教会に集っての礼拝が休止の今の期間だけは、自分も他の教会員と一緒に環境で礼拝することができる嬉んでいた、その胸の内を知ることができました。

この度のコロナ危機で感じたことの1つは、私たちに絶対の答えはないということです。もちろ

ん、そのことを開き直って言うのではありません。責任を託された者は決断を迫られます。今回の役員会の判断は、教会にとって厳しいものでした。しかし、これからの教会の歩みの中で、その選び取りの過程を大切にすることができればと思います。役員会では最終的に礼拝休止を決めたものの、その過程には休止に慎重な意見もありました。また休止の期間、教会員が経験したことは正も負も（それも決まっていない）様々な思いや出来事がありました。本原稿の主旨を私なりに少し意識して筆を進めるなら、「礼拝」や「賛美」に対しても、私たちは1つの答えに安住することなく、より良いあり方を求めて再考し続けることが大切なのでしょう。“ためらうこと”、“ゆれること”、あるいは“もやっとしたもの”…、私たちが感じる、そう表現するような要素（リモートの世界が削ぎ落していくものも）を含む“何か”を、完全ではなくても例えば音楽はすくい取ろうとする。賛美歌を歌う上で、もちろん言葉（歌詞）は大切です。でも私たち人間の言葉だけでは表現し尽くせないことを、メロディーがフォローする。いまコロナ危機で音楽は、言葉と共に言い尽くせない私たちの大切な思い（ためらい等）を代弁し、そして何よりもあらゆる人間的な言葉を遙かに超えた私たちの賛美の対象である存在に仕えるために、無くてならない働きを担っていることにも気づくのです。

「コロナ危機の中で礼拝を続けて」

篠崎教会 猿渡葉子

新型コロナウイルスの出現により、私たちの教会にも多くの課題が投げかけられました。2月末、まだ表立って礼拝の是非を問う声は聞かれていませんでしたが、水面下では、少しずつコロナの恐怖が心の中に沸き立ち始めていました。

そんな中、東京都で学校の休校が決まると信徒の中から、「3月中の礼拝はライブ配信だけにしてほしい」という声が教会に届き、急遽3月8日に臨時執事会が開かれました。いつもは穏やかに進行する執事会がこの時は紛糾しました。出された答えは万全の感染予防対策を取った上での会堂礼拝継続でした。

「不安がある方はライブ礼拝でどうぞ」と言う決定は、出席を教会員個々の判断に委ねた曖昧な決断であったように感じました。特に礼拝奉仕を担っている人は、「感染が怖いから礼拝を休みたい」とは言い出しづらい雰囲気でした。礼拝後のコーヒータイム、食事会等は中止しましたが、3月末には予定通り教会総会も開催しました。4月のイースター迄には、終息して欲しいと祈りつつ3月を過ごしていました。

その後、事態は悪化し、緊急事態宣言が4月に発令され、執事会で再び礼拝の継続か休止か話し合いました。会堂で礼拝を捧げるという意味を深く考えさせられた話し合いでした。執事の意見はまとまりませんでした。最終的に牧師の「礼拝は教会の最も大事な集会である。司会者、奏楽者、ライブ配信者だけでも出席して礼拝を継続しよう」という決定がなされました。

4月、5月の礼拝は毎回15~20名の出席がありました。礼拝のみに集まり、会話も無く1時間程度でさっと帰る、重苦しい空気でした。特に礼拝中に説教が佳境に入ると、換気のため開けてある窓

から、江戸川区の防災無線が大音量で、「不要不急の外出をしないで下さい」と数分にわたり鳴り響きます。やがて「ステイホーム！命を守る行動をとってください」と内容も過激になり、しばしば説教を中断されました。

放送中「礼拝は不要不急なものなのか、不要不急のものであるはずがない」と考えていました。そんな中、4/12 イースターに、一人の壮年のバプテスマ式がとりおこなわれました。困難な中でバプテスマ式が与えられたのは、感謝でした。ライブ礼拝で信仰告白を聞いた方からも励ましを受けたとのメッセージが届きました。

家族の反対のため礼拝出席が出来なかった姉妹と緊急宣言解除後の礼拝で会った時、一緒に礼拝を捧げる喜びで涙が出ました。当たり前になっていて忘れていた日曜日礼拝に招かれ、共に礼拝に与る喜び、感謝に気づきました。

今回のコロナ禍で私たちの教会が学んだのは、「出席が出来ない人を責めてはいけない」「困難の中にある人に目を向ける」事です。会堂礼拝の継続か否かで議論している折、コロナ禍で仕事を失い、休校により給食がなくなり、その日の食事に事欠く人がいることも知りました。5月からフードバンク献金を礼拝の中で募り、集まった献金で食品を購入し「セカンドハーベスト」に食品を届け、6月も7月も継続しています。

礼拝に出席できない多くの会員がいること、その方たちが出席できるようにと祈るだけではなく、何が出来るかを話し合うこともできました。1人の兄弟の申し出により車での送迎奉仕が始まりました。コロナ危機の完全な終息は見えない状況下、どのように礼拝を守って行けば良いのか答えはない中であって、答えを出さないままで耐える力、不安と困難と共に希望を持って生きる力を与えられて、この数か月間を過ごしてきました。

「共に主を仰ぐ群れをめざして」

静岡教会 原田攝生

緊急非常事態宣言を受けて、3密を避けるためにまず昼食や午後のプログラムを休止、その後、教会学校や祈り会を休止、そして4/19以降すべての集会を休止しました。宗教団体の集会は休業要請から除外されると聞きましたが、主に託されている命を大切にすることを第一として、感染拡大防止のために必要な措置をとることも、宗教法人として世にある私たちの責任ある態度だと考えました。

5/17から主日礼拝を再開しましたが、感染が収束したわけではないので、それまで6曲歌っていた賛美歌を3曲にし、各曲の1節と最終節だけを歌う、主の祈り、晚餐式をしないという具合に、礼拝プログラムを少し短縮しています。また、座ったままで賛美するようにしました。共に集まることを大切にしつつ、気温が上がる中、身体の負担を減らし、感染リスクを少しでも抑えるためです。

6年前から礼拝説教、祈り会奨励の動画を、集会后YouTubeにアップしています。それは、集会にお見えになれない方々の聖書の学びの一助になるよう、同じみ言葉を分かち合うためのものです。今回、集会の同時配信というアイデアもあったのですが、ネット配信を始める教会が増加する中、教会、説教者などの比較がなされているといった批判を聞いています。

私の場合、会衆のいないところでビデオカメラに向かって説教を語るのは、なかなか間がもてず、とても難しいものでした。会衆があつて、共にみ言葉に耳を傾け合う中で与えられ、語らせて

いただいているものだと思います。その意味で私のメッセージの射程は、教会員や教会の集いにおいでくださった方々という、互いに顔の見える限定的なものなのでしょう。

これまで、「礼拝」という儀式に参加するのが礼拝なのではなく、神を神とし、イエスを主と告白する生活こそが礼拝そのものだと、ローマ12:1から学んできました。だから、牧師の説教のない礼拝はありますが、祈りも賛美もない礼拝は存在しません。

祈りは、神に聴く行為です。「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる」(ルカ11:13)と約束されているのは、祈りが神に聴き、御心を祈り求める行為だからです。その意味で、聖書を読むというのも優れて祈りの行為ということになります。そして、聴いた神のみ言葉に喜んで従うことは、生活を通してなされる主賛美でしょう。

かくて、各自の日々の祈りと賛美の生活による礼拝を共に持ち寄ってなされる「主日礼拝」は、キリストの体として神の栄光を現す場であり(1コリント6:20)、主に呼び集められた信徒お互いが、共に主を喜ぶ喜びをもって神に喜ばれる供え物とされる場なのです。主にあつて「まことの礼拝者の群れ」として、整えられていきたいと思います。

「四日市教会の礼拝の取り組み」

四日市教会 加藤美代子

1. 礼拝の休止と再開まで —2月末より三重県でもにわかにな型コロナウイルス感染についての緊張が高まってきました。4/16、首相が緊急事態宣言を発出し、20日には、三重県知事が緊急事態措置の実施を発表しました。

4/19の礼拝を最後に、4/26から全ての集会を無期限休止することとなりました。オンライン礼拝等は行わず、必要な教会員には週報などの郵送を行い、日曜日には可能な人は来会して自分で決めた奉仕や献金をするといった内容です。

5/3 三々五々、教会員が来会し、集まった人で証や近況報告。会えてよかった、話せて良かった、との感想がありました。献金、祈り、草取りや清掃、消毒などめいめい自分の決めたことを行い、接触を避けるためあえて遅い時間にこられる方もありました。

その後も来会者数人。適宜祈り、献金、草取り、牧師と懇談する人もあり。次第に有志での祈り合いが発生しました（渴望の声に答えて牧師も交えて）。証、近況報告、祈り、聖書のテキストを読む、など短時間。会堂の数カ所にシロアリが出たのを発見というおまけも。お互いの証や、普段なかなかできない話しができたという声もありました。ペンテコステもそのように過ごし、緩やかな時間の中に、普段の礼拝の中で行われていなかったことについても考えさせられました。

6/7 臨時執事会で礼拝再開の協議。会堂の消毒はこの間定期的に執事によりなされ、6/14から臨時プログラムにより礼拝を再開し、現在に至ります。

2. 礼拝が再開されて—臨時プログラムでの礼拝が初めて行われたとき、なんと音や声の少ない集まりだろうか戸惑いました。時間も30分強で静かな会でした。ろう者の教会員が主の祈りのアーメンの後にありがとう、と声を出されて、それがとても嬉しそうで心に残っています。

終了後、一人の奏楽者の方が「礼拝の開始やプログラムの起点終点がわからない」と気づかれ、「私が来週は奏楽をします」と申し出られました。翌週は自発的に「最初の黙禱」「献金」「祝禱後」に奏楽をしてくださいました。するとその翌週、ある執事が同様の奉仕を申し出て奏楽をされました。この方が奏楽をされるとは全く知らなかったのですが、長年のブランクを超えての自発的なご奉仕と決断に深く感銘を受けました。お二人ともその心や祈りににじみ出る音色で、とても良い奏楽でした。

「奉仕」はそもそも自由で自発的に捧げられるのが本質と思いますが、それを体現されたことだと感じ、私の姿勢も正されました。この他、「献金の祈り」は会衆に聞こえたほうが良いとの意見で再開されています。

「集まりを禁ぜられる経験」をしたあとの集まれることの喜びや安堵は一入で、静かでも確かに嬉々とした様子、教会にとって「礼拝」は正に「いのち」であり、無いと「いのち」は弱まると思ひ知りました。臨時プログラムでは、有志に任せられた状況で奉仕を新たに見出し、献げていくことが起こされていることには今も目を見張ります。苦しみの中から提案されたプログラムを通し、聖霊がいろいろな人のために自由に働いて、互いを愛し仕えるために働いてくださっているように感じます。

今は前奏および、前前奏としてのCDによるBGM

新型コロナウイルスに直面して教会は…

も再開され、それらは礼拝の始まりを告げ、内容を指し示し、備え、確かに形成するのだとよくわかりました。試練は避けられないですが凶らずも「全員」が弱くされた中で、「礼拝は誰のためか」、「互いを愛することの体現」、「安心して集うための準備」など多くのことについて教会員がより深くかかわり、新たな形が模索されていくことになると感じています。

「コロナ危機の中での

神戸西教会の礼拝対応」

神戸西教会 松本 理

文書形式礼拝への経緯—4/5に行われた役員会で、次週のイースター礼拝をコンパクトに行う準備をしていましたが、4/7に政府から出された緊急事態宣言と兵庫県内の感染者の上昇などから、役員によるメール稟議によって4/8以降の教会での全ての集会を中止することとしました。礼拝については、役員会でオンラインによる礼拝の動画配信も考えましたが、結論には至りませんでした。そこで5日後の日曜日にすべての教会員が家庭礼拝を行えるようにすることを目標として、文書形式の礼拝を配ることとしました。内容は、選曲された賛美歌、執事による祈祷文、聖書箇所、宣教と個人の応答の祈りへの促しで、その後、応答賛美が加えられました。文章を配る方法としては、電子メール、LINE、FAX、郵便を用いました。責任者は牧師でしたが、教会員すべての電子メールやLINEの情報を把握していないので、女性会には「祈りのリーダーたち」（後述）に配布を依頼していきました。イースター礼拝後、動画配信の可能性について検討した結果、受信または視聴できる環境や機器を持っていない人が相当数い

たこと、配信などに関われる人（知識のある人、奉仕者）がいなかったこと、また予想以上に文書による礼拝が教会員に好評だったため文書礼拝を継続していくこととしました。

教会員からの感想—「常会」（例会）などでの文書形式礼拝の振り返りでは、「文書形式なので何度も自分のペースで読み返すことができ良かった」という感想が多く寄せられました。いつもならば聞き流していることが多かったことに気づいたというのです。他には、「いつもの礼拝の開始時間に 同じように教会の人たちが礼拝を共有していることが感じられて嬉しかった」、「静かに神さまと一対一で向き合えた」、「祈祷文は執事が作るという教会員の礼拝参加がなされてよかった」、「文章を家族の人に読んでもらうなど家族に共有できた」、求道者や知り合いに伝道のツールとして届けられた（宣教は「神さまとの交わり」という信仰の基礎的なことをテーマにした）」、などが挙げられました。

考察—文書形式の礼拝にして思いがけなくうれしかった恵みは、女性会の「祈りのグループ（すべての女性会員が月1回グループごとに祈りの課題を共に分かち合い、祈り合う）」のリーダーが、教会で集会ができなくなった時、長期礼拝欠席者の方々も含めて連絡を取り、文章を送り届けてくださり、また必要に応じて牧師にそれぞれのグループの教会員の様子などの報告があったことでした。あるリーダーは、土曜日の夕方に送られてきた文書礼拝のメールを、受信する携帯電話が小さくて多くの文章を読めない教会員のところへ、日曜日の朝ごとに届けてくださったことを、毎週、感謝されていることを喜びとして語ってくれました。自主的に動画サイトを利用する動画配信とは違い、文書形式の場合は「配られるの

を待つ」ことが必要となります。そのできごとから、送られた人と送った人の間で「感謝の思い」が生まれていきました。また今回は、全ての教会員に確実に行きわたるよう配ったため、今まで教会との関係に距離のあった人たちが、これを機に教会と近くなり、その後再び来会されるようになったり、献金を届けられたり、現在も宣教が送られてくることを楽しみにされています。最後に、この文書礼拝は日頃の礼拝の代わりになると尋ねると、礼拝で実際に耳にする他の人たちの歌声や共に集い宣教に聞いていくことには「代わり得ない」ということが確認されています。

「久留米教会の取り組み」

久留米教会 踊真一郎

3月の執事会は活発な議論が交わされました。内容は新型コロナウイルス感染拡大に伴う礼拝自粛についてです。久留米は福岡市と電車で30分の通勤圏内であり、教会には保育施設を併設しているため感染リスクを抑えねばならないが、一方で危険性や広がりが見えぬ中で礼拝自粛の踏ん切りもつかず、結論は「久留米市内にて感染者が発表されたら礼拝を自粛」でした。そして3月末、とうとう市内での感染者発表がされ、4/5に礼拝自粛を決断。同時にyoutubeでの礼拝ネット配信を開始しました。以前より教会HPにて宣教録音の音声配信だけはしていましたが、今回こだわったのはライブ配信です。教会に集えなくても同じ時に共に礼拝を守りたいからでした。大多数のメンバーは配信に対応くださいましたが、ネットが苦手な方々には、続けて礼拝に参加いただいたり（会堂が広いので相互の距離が十分に確保可能）、翌日に週報と宣教CDの配達を続けました。また、教会メンバーが感染拡大の不安の中でも神さまを身近に感じていただけるように、4/12から毎

朝の「みことばメール」配信も始めました。

久留米教会では早い段階で久留米市内での感染者が少なくなったこともあり、緊急事態宣言解除から一週あけて5/31のペンテコステから礼拝を再開しています。マスク着用やアルコール消毒、ソーシャルディスタンスや換気、礼拝プログラムの簡略化、礼拝後の諸会休止は続いています、皆で集う礼拝は喜びに溢れています。

一方、再開時に一人のメンバーの要望、「礼拝配信で楽譜も画面に出せないか？ネット礼拝で一度、知らない賛美歌が歌われた時、淋しかった。」から、ネット礼拝の弱点と課題も教えられました。ネット礼拝は確かに便利です。出張や入院など、その日の礼拝に来れないメンバーには、時間や場所に合わせて礼拝を見ることはできて便利です。使うアプリによっては双方向のやりとりも可能です。でも、やはりネット礼拝では「共に集う」実感に乏しく、利用の方々を単なる視聴者にしてしまいます。また「どこからでも」礼拝を観れることは、地域性と「教会がその地域で福音宣教の役割を担っている」との使命感を希薄にするように思うのです。

6-7月、久留米教会の礼拝宣教では「礼拝さいこう」というシリーズを続けました。「さいこう」に毎週、順に「最高」「再考」「砕鉦」「採光」「細行」「（礼拝）さ行こう」「再興」「最高」と当てはめてみことばを分かち合ったのです。この取り組みを通して、神さまが伴ってくださる慰めを喜ぶと共に、「教会とは何か、私たちは何によって生かされているのか、教会が守るのはなにか、これからどんな教会でありたいか」を問いかけ、皆で考えようとしています。新型コロナウイルスは未だ終息しませんが、この時だからこそ礼拝に集中しつつ、今後の教会の姿を模索しています。

「コロナ危機の中で受けた礼拝の恵み」

長崎教会 曹 銀珉

「どうすれば一人でも多くの人が礼拝に集い、主の恵みを受けて、主と共に歩むことができるか」牧師として今まではこの目標に向かって励んできたと思います。しかし、コロナ危機に直面し、ある方から「今、会堂での礼拝は兄弟姉妹の命を危険にさらすことだ」と言われたとき、私は目標を失ったような気がしました。主を礼拝するために長崎の地にたてられた教会として、共に集い聖霊の臨在の中で一つとなって礼拝を捧げることを使命として思っていたので、会堂に集う礼拝を中止することは受け入れがたいものでした。

どのように礼拝を守るべきかと悩んでいたある日、動画配信の奉仕をしてくださっている兄弟より以前からライブ配信を試みたくて設備を整えてきたが、漸くできるようになったと報告がありました。主の御計らいを感じつつ、4月第3主日から会堂に集う礼拝を中止し、ライブ配信による各家庭での礼拝を始めました。礼拝に対する何かの考えがあってライブ配信を始めたわけではなく、それしか選択肢がない状況の中で導かれて始まったことでした。

最初は見えない会衆に向かって語ることに何とも言えない寂しさを感じました。けれども、礼拝後に寄せられる感想や証しのメール、平日に献金を携えて教会に来てくださる方々との交わりを通して改めて2つのことに気づきました。まず、聖霊は場所や時間を超えて働かれ、教会の群れを一つにし、主の御前で礼拝者として立ててくださるということです。聖霊の働きを感じながら捧げる礼拝は大きな恵みでした。もう

一つは、わたしたちはそれぞれの家庭に遣わされていることです。家族をライブ礼拝に誘い家庭礼拝として守るようになった方、子どもたちと一緒に家族全員で礼拝を守るようになった方、離れている家族を誘って礼拝後に皆で恵みを分かち合うようになった方もいました。会堂中心の信仰生活から家庭中心の信仰生活を送る良い機会でした。

6月から会堂での礼拝を再開していますが、集えない方々のためにライブ配信も併用しています。その中で見えてきた課題があります。引き続きライブ配信による礼拝を守ろうとする方々が現れ、その方々との交わりが十分できていないことです。また、会堂での礼拝とライブ配信の併用のために奉仕者の負担が増えていることです。

最後に長崎教会で行った賛美の取り組みをご紹介します。まず、各家庭で礼拝を一緒に守る子どもたちが多かったので、礼拝の前のプレイズの時間や礼拝中の賛美歌1曲を子ども向けの賛美を選曲し、皆で賛美する喜びを味わうことができました。また、以前『新生讃美歌』内の「感謝」をテーマにした賛美歌の替え歌を教会の皆さんと考えて長崎バージョンを作ったのですが、プレイズチームがその賛美動画を作り、どんなときにも感謝する信仰を励ますことができました。

コロナ危機により戸惑いの中で始まった新しいスタイルの礼拝でしたが、主はその中でも豊かな恵みを注いでくださいました。主に感謝！

事例紹介に回答して

濱野 道雄（鳥栖教会、西南学院大学神学部教員）

新型コロナウイルス感染症拡大の影響下での長い歩み、本当に大変ですよ。皆さまに心から敬意を表します。そして神の導きに感謝いたします。

これまでのやり方が続けられない中、それでもやり方を変えて教会の歩みを続けていらっしゃる姿を全ての事例に読みます。やり方は変わるけれども、変わらないものは何か、「教会とは何か」（久留米）、礼拝とは何か、皆さまあらためてお考えになったことでしょうか。

そして「礼拝」という儀式に参加するのが礼拝なのではなく、神を神とし、イエスを主と告白する生活こそが礼拝（静岡）と捉えることで、「“集会としての礼拝”はお休みし“それぞれの場所での礼拝”をささげ」と決め「決して礼拝自体を中止してなど」（札幌）ない諸教会の姿に勇気づけられます。もし礼拝とは何か、が聖書によって捉えられているならば、その方法は自由に、「絶対の答えはない」

（高崎）取り組みを、教会で丁寧に（かつ今回は急いで）話し合いつつ柔軟に試行錯誤することもまた許されているし、そこに深い喜びがあるのでしょうか。古くより「神と霊魂との直接的关系を主張し、教会、教職、式典等の仲保的功德を認めないこと」（『バプテスト教會員必携』1935）としてきたバプテストの、現代的あり方に相応しいと思います。

そもそも私たちの礼拝はイエスの始めた風景にあったのではと思うのです。「東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、

ヤコブと共に宴会の席に着く」（マタイ8：11）、この天の「宴会」が地上になだれ込み、そこに全ての人が招かれ共に祝う時を、イエスは実際に2匹の魚と5つのパンを分かち合う事で始めて下さった。ここに私たちの礼拝の姿があると私は思います。ですから礼拝の主催者は神で、私たちではありません。ですから礼拝を「止める」「止めない」と、そもそも人間が議論する話でもないでしょう。そうすると、一方で「礼拝を止める」とだけ言い何もしない姿勢、その一方で「ネット礼拝ではなく、礼拝堂に共に集まらなければ礼拝をした事にはならない」という姿勢、その両方とも礼拝を神の主催によるものではなく、人間のイベントにしてしまう姿勢に思えます。神が主催者なので礼拝は止められないし、神が主催者だからこそ、それに応答する人間の方法は柔軟に変えることがゆるされていると思うのです。

そこで具体的にネット礼拝や文書礼拝の可能性が探られることになります。その時も「聖霊は場所や時間を超えて働かれ」（長崎）ることを私も信じます。技術は技術に過ぎないので、ハイテクのネット礼拝でなくとも、文書礼拝で豊かな礼拝が持たれている事例(神戸西)を嬉しく読みました。

インターネットも、それを身体や共同体から世界を切り離す道具とするのも、身体や共同体を「延長」する道具とするのも、最終的には私たち次第に思えます。怖がり過ぎる事も、万能視し過ぎる事もあります。ネット礼拝の課題

として「『共に集う』実感」（久留米）、
「教会の群れを一つ」（長崎）にするあり方をどう確保するのかということがやはりあるでしょう。ネットを使いながらも一方通行にならず、メールなども駆使しながら双方向になる取り組みを皆さんなさっています。また1人ではなく家族等、数人でネット礼拝に参加する方法もあるでしょう。そうすることで共同体や身体の延長としてのネット礼拝ができる訳です。「バプテスマ及び聖餐の表象的意義」（『バプテスト教員必携』1935）を言っていたバプテストに、それが出来ないはずはないでしょう。

しかしその一方で共同体から切り離された使い方、例えば、静岡教会でそうならないように注意された「説教者などの比較がなされている」といったことも、実際に起こり得ます。ネット礼拝にどのように参加するのかを予め教会で話しておくことが大切でしょう。例えば無牧師教会等で毎週説教者を立てられない（ここには別の課題がありますが）ので、他教会のネット礼拝に参加するという実際の声も聴きましたが、そのような場合、どの教会のネット礼拝に参加しても良い、ではなく、教会としてある教会にお願いして、コロナ禍が続く間はそちらのネット礼拝に参加させて頂くと初めに決めておくなどの工夫が、共同体を保つために有用ではないでしょうか。

その一方、ネット礼拝や声を発さない礼拝が単に“集会としての礼拝”の替わりでないことに気づかれた事例もいくつかあります。
「心の病のために長期間礼拝を休んでいる教

員が…自分も他の教会員と一緒に環境で礼拝することができる喜んでいた」（高崎）、「ろう者の教会員が主の祈りのアーメンの後にありがとう、と声を出されて、それがとても嬉しそうで」（四日市）あった礼拝も生まれている訳です。従来の礼拝がどこか多数派（マジョリティ）の「強い人中心」（礼拝に行く体力、財力、時間のある人、精神的や社会的に他の人間と会うことが苦痛でない人）に出来ていなかったか、少数派（マイノリティ）を無意識にも締め出していなかったか、を問い直す良い機会になるのかもしれない。

その上で、コロナ危機が収束すれば勿論、身体を持って集まれる人はまた集まることも恵みでしょう。身体は神からのプレゼントだからです。そしてそれぞれに違う神からのプレゼントを共に、フェアに、喜び合うのが神の国の宴会、礼拝ではないでしょうか。

神が主催される「礼拝は…不要不急のものであるはずがない」（篠崎）という思いは尊いことです。だからこそ、「礼拝は【この世界から見れば】最も不要・不急な祝福された時」とも言えるかもしれません。礼拝は「新しい時間」（ジョン・スウイントン）なのです。この姿勢を持つ時、コロナ危機が浮き彫りにした格差世界の中で切り落とされる人々、命の選別をされ、「不要・不急の存在」にされる人々と共に生きる言葉が、道が、現れてくるのではないのでしょうか。不安が広がる世界で希望を教会は語ります。教会はコロナ以前から、コロナ収束後も、主が再び来る日まで希望を語り続けるのです。

感染症の歴史と賛美歌

「感染症と宗教改革たち」（『宣研ニューズレター』No 120）を受けて、 ～教会音楽史をあらためて振り返る

コロナ感染拡大の危機にあって、礼拝や賛美について、戸惑い、試行錯誤する中、様々な情報発信にあたり、指針となる論考や記事を渴望する日々が続いています。そのような折、発信された「宣教研究所ニューズレター」を、この間大きな関心をもって読ませていただきました。中でもNo. 120（2020. 6. 17発行）では、「感染症と宗教改革者たち」

（朴思郁宣教研究所所長）として、感染症である「黒死病」（ペスト）と向き合っていた、フルドリッヒ・ツヴィングリ、マルティン・ルター、ジャン・カルヴァン、テオドール・ド・ベーズらの働きについて多くの紙面が割かれたことは意味深く、今まで閉じられていた扉が開かれる思いでした。

※「宣教研究所ニューズレター」No.120は、
宣教研究所ホームページ <http://senken-bap.com/>
「新着情報欄」にアップされています。

宗教改革の担い手である上記の神学者らは、牧師や神学者のみならず多くの信徒によって知られていますが、「教会音楽」の分野でも、特にルターやカルヴァンらの礼拝の賛美のあり方や何を歌うかのこだわり、礼拝式の制定、賛美歌集編纂、会衆賛美の推進の歴史は重要で、東京バプテスト神学校で担当する「教会音楽概論」「賛美歌学」の授業においても、教会音楽史の中で欠かすことのできないチャプター（章）となっています。

そして今回、これまで教会音楽史の教科書では限られるほどしか触れられていなかった「感染症との闘い」の歴史を、ルターやカルヴァンの「礼拝の賛美の改革」、それに伴う「歌集の編纂の尽力」の背後で、大きく影響を及ぼしたであろう「できごと」として、深く心に刻むこととなりました。

カルヴァンは、賛美のことば（テキスト）は神のことばとしての「詩編」がふさわしいと、詩編の韻文化（歌いやすく、音や音節を整えるもの）と作曲に着手し、「詩編歌」を編纂していきました。最初の詩編歌集が出版されたのが、カルヴァンが再びジュネーブに戻った翌年1542年で、その年はジュネーブに「黒死病」（ペスト）が発生したのと奇しくも同じ年だったのです。その後150篇の全詩編が収録されたのが1562年で、この作詞の業を引き継いだのがテオドール・ド・ベーズでした。「詩編歌」完成に至るまでの間、黒死病の脅威にさらされていたことは想像されることです。そして今回あらたに、「ベーズが、若い日に黒死病を患い、神の前で自分を振り返ることによって、詩人として出世しようとした欲望から逃れて教会改革者となった」ということを知りました。自ら感染症の病を煩った経験がその後の人生を変え、教会改革者としての働きに従事していく道に向かわせ、礼拝と賛美の制定にあっては「人々に必要な『賛美のことば』を整えていく」詩人と

しての働きが大きく用いられていったので
す。

賛美歌は、感謝、喜び、嘆き、叫び、信仰告白、悔い改めと、様々な人々の思いを表わす応答の歌であり、「詩編歌」にはその神の民の「賛美のことば」が幅広く収録されています。感染症の脅威に苛まれ、また、病と死の恐怖を経験したベーズは、人々と神とをつなぐ「賛美（歌）」のことば「詩編歌」を編纂するという使命を人一倍感じていた人だったのではないのでしょうか。これまで、「詩編歌」を提唱したカルヴァン、その「詩編歌、全150篇を完成したベーズ」の一部分しか記憶されておらず、その背後にあった感染症との

闘いを巡るできごとを知らなかったものとして、賛美歌集編纂の大切な使命にあらためて気づかされた思いです。

今、この危機にあって私たちは何を歌うのでしょうか？ 歌うことさえ阻まれている状況があり、「教会音楽」に携わるものにとって、困惑の日々の中にあります。ベーズらが、感染症の脅威と隣り合わせにある中で、礼拝や賛美のことばを整えていったように、この危機にあって礼拝の意味をあらためて確認し、今必要とされている賛美歌のことばを探し求めていきたいと願っています。

(江原美歌子)

アメリカ・カナダ賛美歌学会大会報告

アメリカ・カナダ賛美歌学会大会が去る7/12～7/16開催されました。例年この時期に開催される大会ですが、時間と費用がかかることからこれまで断念してきたもので、今回、コロナ感染拡大がアメリカでも深刻な状況となり、大会の実施の有無には関心が寄せられていました。コロナ感染が世界に広がりはじめた3/24、学会のメーリング・リストによって「この大会の開催についてみなさんで考えていきましょう」と呼びかけがあり、毎週火曜日の日本時間の深夜、オンラインによる会議が重ねられていきました。最終的に決定されたのが4/22で、「すべてオンライン」で研修会を開催するというものでした。

この知らせを聞き、これまでは参加を諦め

てきたものが「今回は参加できる！」となったのです。この度、オンラインによる研修会がどのように開催されるかの関心もあり参加させていただきました。大会は6大陸、15カ国、カナダ（6州）、アメリカ（36州）から372名と、これまでの大会では考えられない、幅広い地域と人数の参加登録の規模となりました。

テーマは「Why We Sing- the Song, the Singer, the Singing」（なぜ私たちは歌うのか？歌、歌い手、歌うこと）で、これは歌うことが制限されるコロナ危機の以前から決定していたテーマです。あらたな課題を受けつつ、なぜ歌うのだろうか？をあらためて考えさせられた機会となりました。

…アメリカ・カナダ賛美歌学会大会報告

以下、トピックスをご紹介します。

コロナ感染拡大の状況にあってアメリカの諸教会がどのように取り組んでいるか？を知る機会となったのは、「コロナ感染危機状況下の礼拝」のテーマでのディスカッションです。120-30名がオンラインで参加し、プログラムは「1つの投げかけを受け、8名ほどのグループで分かち合う」（ブレイクルーム）という形を3回繰り返して行くものでした。日本からの参加は私ひとり、所属教会での「グループ別による分散礼拝」を紹介すると、まだ、アメリカの多くの教会がその段階ではないためか、「どのようにグループ分けをしているのか？」など質問を受けました。「教会員でコロナで亡くなった方が3人いる」など、緊迫した状況にあることが伝わってきました。どの教会もそれぞれの取り組みがあり、その混乱や悩みの中を歩まれている、「今は」その取り組みを分かち合っていく段階で、「これから」を模索している状況にあると感じました。

多くのアフリカ系アメリカ人の講師がたてられ、基調講演、オルガン演奏、賛美のリードがなされたことは印象的でした。時を同じくして「ブラック・ライヴズ・マター」のデモが全米各地で行われている只中で、彼ら彼女から、尊敬の念をもって学んでいこうとする真摯な姿勢を見る思いでした。

大会は司会者が各クラス毎に画面に映し出されて参加者を迎える形で各プログラムが始められ、全米各地で行われている講演をつなぐリレー形式で進行していきました。プログラ

ムの流れを支えたオンライン・プログラム・スタッフと技術者のチームなくしては、この研修会の成功を見なかったことでしょう。今後、礼拝やこのような研修会では、「オンライン」の技術が益々用いられていくことが想像されました。

今回の研修の私の中でのハイライトは「アジアの教会音楽家に聞く」というプログラムで、コーディネーターは日本人の博士課程の教会音楽の学生である尾尻早弥さんです。パレスチナ、台湾、韓国、インドネシア、インド、シンガポールの教会音楽家の6名が、ズームの画面に映し出され（写真参照）、各国の礼拝と賛美の様子を紹介していくものでした。このプログラムはまさに同時間帯で「世界をつなぐ」もので、各国の礼拝や賛美の様子が動画でも映し出され、オンラインならではの技術により、このような学びが可能になったことに驚きと感動を覚えました。

この他にも、「オルガン即興演奏の基本のレッスン」（30分）や、「教会音楽主事の学び」、「賛美礼拝」実践が紹介され、リモートによる研修会に想像以上の可能性があるこ



2段目左が尾尻早弥さん、1段目右は『新生讃美歌』334番のイ・コニョンさん、写真：アメリカ・カナダ賛美歌学会より使用許諾済み

とに触れ刺激されました。嬉しいのは、30以上のプログラムが12月まで視聴可能で、英語が聞き取れなかったクラスなど聞き返すことができ、また、通常の大会では平行プログラムは同時に受講できないものが、今回は、大会後はすべてのクラスを視聴できるシステムとなっているのです。大いに活用し、12月まで学びを続けていきたいと思えます。

大会後は、学会の総会がオンラインで行われました。会計報告書などが画面で共有されたり、採決では「賛成」「反対」の選択欄が画面に映し出される形で投票がなされ、リモートによる総会も新しく経験させていただきました。

研修会はアメリカ東時間（ニューヨークと同じ時間帯）で開催され、朝の礼拝は現地の朝10時、こちらの深夜11時で、夕べのプログラムは現地19：30、こちらの翌朝8：30と昼夜が逆転し、その後1週間は海外旅行並みの時差ぼけに悩まされましたが、この新しく貴重な経験から大いに触発されました。今後の連盟での研修会の可能性や諸教会の礼拝と賛美に資する学びあいの形を模索しつつ、あらたに挑戦していきたいと願っています。（江原美歌子）

※ Youtubeで、1：大会のダイジェスト、

2：尾尻早弥さんのセッションを視聴できます。

1 <https://www.youtube.com/watch?v=FeloCImHIJk>

2 <https://www.youtube.com/watch?v=oCxwqBAmKIE>

コロナ危機にあって 礼拝と賛美歌著作権

コロナ感染症拡大の懸念から、連盟の諸活動が次々に中止、延期の決定を余儀なくされた2月末から、諸教会からは、礼拝の動画配信における、賛美歌著作権の問い合わせを受けるようになりました。3月、いよいよ、感染拡大が心配されるようになり、その問い合わせはさらに増えていきました。

問い合わせの多くは、礼拝を動画配信する際の賛美歌著作権申請についてです。たとえ営利目的でないものであっても、著作物使用には申請が必要であることは以前からもご案内してきたところです。例えば、所属する相模中央教会では、頌栄672番を長年歌ってきましたが、礼拝の動画配信にあたり問い合わせたところ、アーカイブ（録画）の場合1回10万円と返答があり、頌栄をやむなく変えることとなりました。

礼拝毎に賛美歌著作権許諾を申請することの煩雑さや、請求額も場合によっては高額になることから、教会音楽室では、連盟の管理著作物はこのコロナ危機の間は申請手続きを免除することが諸教会の助けとなると判断し、急ぎ「『新生讃美歌』使用許可申請不要曲リスト2020（インターネット動画配信用）」を作成し、4月に公開いたしました。このリストには、パブリック・ドメイン（PD）—作者没後50年のものは著作権消滅となる—も含まれていますが、あわせて約400曲もの賛美歌が2020年度は申請不要となりました。多くの教会より「助かります！」との声をいただいております。

その後も、お問い合わせをいただいております。次ページで Q&Aとしてご案内いたします。

…礼拝と賛美歌著作権 Q&A

**Q1. 著作権が有効な著作物であっても動画にあげていたらいずれ消去されるので、申請手続きは
いらないのでは？**

A1. インターネット上に載せたものが消去されるということは、「この動画は著作権の侵害
をしている」と申し立てを受けたということです。いつ、いかなる理由であっても、原則的
には著作権者（もしくは管理者）の許可を得ない著作物の無断使用は著作権法に違反しま
す。教会が責任をもって活動していることを社会へ証しするためにも、申し立てを受けるの
を待つのでなく、事前に許可を得てから使用しましょう。なお、動画共有サイトによっ
ては、一定期間内に3回以上の画像削除等の申し立て対応（違反警告）を受けた場合、使用して
いるチャンネルアカウントが凍結される等の罰則を設けている場合もあります。

Q2. 聖歌隊の以前録音した賛美を動画サイトにあげるには、使用申請する必要がありますか？

A2. 今回、申請不要対応の対象としたのは、礼拝全体の動画についてです。対象期間外の使
用動画や、礼拝としてのもの以外の動画（コンサートなど礼拝以外の集会での使用動画だけ
でなく、礼拝中の賛美の様子を抜き出した動画も含む）での使用は、今回の特別対応の対象
外としています。使用希望の場合は、教会音楽室までご相談ください。

Q3. 動画配信を限定公開しているので、申請は必要ないのでは？

A3. 検索には該当せず、動画のURLを知っている人だけがアクセスできる設定が「限定公
開」ですが、インターネット上にアップロードをするということは、たとえ「非公開」で
あってもその情報が複製されインターネット上の世界に永遠に何らかの形で残り続けます。
また、YouTube等の動画サイトは、あくまで動画「共有」サイトであり、「保存」サイトでは
ありません。基本的に多数の人と「共有」する場所として設けられているものであるとい
うことを念頭に置き、公開範囲が限定的に思える場合でも正しく手続きをして利用しまし
ょう。

教会音楽室からのお知らせ

2020年9月10日(木)、「地方連合教会音楽担当者連絡協議会」(オンライン)を開催します！

2020年度のはじめ、教会活動は果たしてどうなるのだろうか？という思いでスタートしまし
た。緊急事態宣言解除後の6月からは、教会音楽専門委員会議、賛美歌検討委員会議とも、オン
ラインというツールを得て、徐々に会議を再開していきました。ズームソフトを用いての会議で
すが、数時間の会議を、臨機応変に日程調整することが可能となり、委員を通して諸教会の声
が分かち合われていきました。その中で、計画にあげられたのが、「地方連合教会音楽連絡協議
会」です。これまでは、13地方連合の教会音楽担当者が一堂に会して、連盟事務所に宿泊して協
議会を行ってきたもので、各地方連合の活動報告、情報交換や、励ましあいがなされ、大変有意
義な機会となっていました。

この度、リモート会議の可能性が広がる中で、礼拝と賛美の課題を持ち寄る場を設けることが
実現可能となり、9/10に協議会を開催する運びとしました。メールでご案内したところ、ほとん
どの連合から参加予定との応答があり、今からお会いできることを楽しみにしています。上記のわ
かちあいの他、コロナ危機の中、今どのような協力関係を構築できるかを協議していく予定で
す。どうぞ、お祈りに覚えてください。